

中途失明者に対する点字指導 —日本ライトハウスにおける点字指導—

日本ライトハウス
職業生活訓練センター
坂 本 美磨子

目 次

はじめに
オリエンテーション、および、授業時間割編成時の諸注意
単元 1. 点字器の説明と使い方のコツ
単元 2. 点の打ち方の基礎練習
単元 3. 左手読みの基礎練習
単元 4. 写し書きの基礎練習
単元 5. 6点の名称と、位置関係
単元 6. 1マス1字(50音、撥音、長音、促音の書き方、読み方)
単元 7. 2マス1字(濁音、半濁音、拗音、拗濁音、拗半濁音) の書き方、読み方
単元 8. 単語・單文の書きと読み
単元 9. 数字と算数記号
単元 10. アルファベット、特殊音
単元 11. 文章記号と文章を書くときの諸注意
あとがき
点字教材

はじめに

中途失明者にとって、点字の読みかきを勉強することは、晴眼者が点訳奉仕のために点字を覚えるということと、全く違うものである。ただ、記号を覚えればよいのであれば、本人に興味を持たせるだけで、ある程度点字の世界に引きこむことができるものだが、中途失明者の場合は、失明を受け入れた瞬間から、点字を勉強しなければいけないという重圧感として、点字に対する人が殆どであるため、点字を指導する者が、まず、心しなければならないこと

は、その重圧感をなくし、点字に対する親愛感、興味、征服欲という方向に、意識の方向を変えさせることである。

次に大切なことは、点字のよみかきということが、完全に手の仕事であることだ。頭で覚えさせては逆効果がある。失明年令が高くなるほど、指導する者が、これを意識して、頭を使わないので、機械的な種々の動作を繰り返させ、思考に動作がついて行くのでなく、動作に思考がついて行くように指導しなければいけない。

3番目は、点字が手仕事であるということから、よみかき共に、姿勢と道具の使い方、および、手順といったものが、最初の指導により、能率をいかに左右するか、これを認識しなければいけない。非能率な悪いくせをつけないように、はじめの段階でしつこく注意を繰り返さなければいけない。

なお、点字指導者として望ましいことは、自身も触読ができるということである。触読のむずかしさや、まちがいやすい文字などを、自身の経験を生かしながら、的確にアドバイスをしていくことは、点字を勉強する者に対して、いろいろとプラスされる筈である。

更に、別にすみ字の時間を設け、中途失明者が、漢字を忘れないように、また、点字を読みながら、頭の中で漢字を描けるように、常に漢字に対する興味を失わさないようにしたいものである。

オリエンテーション、および、授業時間割編成時の諸注意

1) オリエンテーションの間に、個人面接を行い、次の諸事項を確認して、授業各段階において、各訓練生に対する指導法の予備知識とする。面接は一人5～10分とし、なるだけ世間話のようにして、自然に聞き出すのがよい。

- (1) 現在の体調、および、眼の状態。
- (2) 失明原因、および、失明前の視力。
- (3) 新聞が読めなくなってからの経過年月数。
- (4) 失明前、読書が好きだったか否か。
- (5) 点字についての知識、経験。
- (6) 左ひとさし指に異常がないかどうか。右手に異常がないかどうか。

2) オリエンテーション時に、全員に話しておくこと。

- (1) 点字は普通文字（すみ字）とちがって音を表す記号であること。
- (2) 点字の歴史と、成り立ち。（これは、ごく簡単でよい。）
- (3) 上の二つの結論として、一つの点の大切さ、重みを意識づける。
- (4) 触読が決してむずかしいものではないこと。ただし、毎日の積み重ねを怠れば、進歩しないこと。

(5) 焦らずに、段階を追って練習すれば、必ず読めるということを繰り返し、心理的に不安を除き、必ず読めるという確信の暗示をかけること。

3) 授業時間数

1日1時間（実質50分）授業を、1週4日以上とし、毎時間宿題を与える。その日のうちに復習をさせる。自習の習慣がつくまでは、時間のはじめに、宿題を点検し、丁寧に批評すること。少しでも遅れそうな訓練生には、早いうちに補習を行い、全体の流れについて来れるようにすべきである。

4) クラス編成について

1クラス8～12名が最も能率的で効果が上がる。学歴・社会経験などは、あまりこだわらずにクラス編成をして、どんどん進めながら、落ちこぼれそうな人は手遅れにならないうちに、補習をして引っぱって行くことが大切だ。

既に何らかの方法で、点字を少し習っている訓練生があっても、もし本人が納得すれば、全く最初から同じクラスに入れて、不自然なくせを見つければ、早いうちに矯正しながら進めるのがよい。

しかし、言葉で説明してもそれを動作に結びつけられない程度の訓練生と、指先の知覚神経、運動機能に異常のある訓練生は、別クラスとして、基礎単元にこだわらずに、個別に工夫が必要である。

単元1. 点字器の説明と、使い方のコツ（1時間）

1) 全体を両手でさわらせて、取りはずせる金具（定規）をはずして左横に置かせる。

☆注意 点字器と点筆以外のものは、机の上に置かさないこと。

2) 紙押さえ（押さえ金）の位置を説明し、手前中心の爪型を使って、片手で開閉するくせをつける。

☆注意 点字独習者に案外多い両手開閉の場合、用紙をはさんでから紙押さえを閉めるはずみに、折角きっちりはさんだ用紙がずれて、ゆがむことがあります。裏を使用不可能にする場合もあるため、極力最初に片手開閉のくせをつけたい。

3) 紙押さえをいっぱいに開けると、ふたの部分と、板についている部分との境の中央に、6cmほどのしきり（上に折れ曲がった部分）があることを確認させる。用紙をはさむとき、このしきりいっぱいに用紙のはしを当てさせるため、場所をよく覚えさせる。

4) しきりの両端から左右2cmほど外側の、1cmほど手前に、上向きの針があるのを、両手のひとさし指で確認させ、よく場所を覚えさせる。必ず両手同時にさわらせること。

紙押さえのふたの部分にも下向きの針が左右にあり、ふたを閉めたときに上向き針と下向き針がくいちがうことにより、用紙の裏返しが、定められたずれに固定され、点字用紙両面に書けることを説明しておくこと。

5) 紙押さえを閉じさせて、ふたの左寄りの四つの穴を確認させ、これはページ数を書くための点字のマスであることを説明しておく。

6) 定規を固定する穴、および、溝の確認。

紙押さえのすぐ手前から、板の左右はしに縦に溝があり、その溝の中に、定規を固定する穴が、左右対称同間隔に九つずつある。これを左右の手で同時に紙押さえのそばから一つずつ確認させる。左右の手が同時に動くように注意する。

7) 定規についての説明

先に左横におかせた定規を手に持たせて、全体の形をよく観察させる。窓(マス)が並んでいるのが表であり、裏の左右両方にある足は、中心より手前によっていることを確認させる。表の左はしの止め具は右はしの金具より大きいことも確認させる。右はしの金具は、上下2枚のうちの下側についていて、上側はそれにさしこんできることを、右先端を持ってはずさせて確認させる。左側の大きい方の止め具を支点にして回転させることができる。

2枚のうち上側には、窓(マス)が2列あり、1列に32個並んでいる。その一つのマスが点字の一つの単位となり、ひとマスで1字のもの、ふたマスで1字のものなどがあること。

2枚のうち下側には、ひとマスに6個の丸いくぼみが縦3個、横2列に凹んでいること。以上を説明しながら確認させる。

上側の裏側に指を触れさせて、各列4箇所、全部で8箇所、マスとマスの間のさん(桟)が裏に突き出していることを確認させ、それが、裏面の点字を書くときに、表に書いた点字がつぶれないように、上下2枚の間隔を並行に一定に保たせるためであることを説明しておくこと。

なお、マスのあいでいる上側は曲がりやすいので、上に物をのせたり、落したりしないよう、よく注意しておく。曲がると点字が書きにくくなるということも説明し、はじめのうちは点字が書きにくそうな訓練生があれば、指導者がよく気を付け、2枚の間隔が並行に保てるよう直してやらねばいけない。

8) 点筆について、その持ち方、および、点の打ち方など。

点筆は机の面に垂直に立つように、訓練生各自にまず工夫させる。机の上を軽く連続してトントンとたたかせる。その間に各訓練生の指の長さ、手の肉のつき具合など考慮しながら、アドバイスをしてまわる。手首は軽く机につけるように、手首を浮かせると疲れやすく、点が不安定になりやすいので注意した

い。中途失明者特有の右手前にたおれやすい人は、中指も点筆にかけさせた方がいいし、手の小さい訓練生の場合、おや指で頂点を押さえせるのも案外よい結果を見る。要するになるだけ早いうちに、各訓練生にあったにぎり方を見付けさせなければ、最初についた悪いくせは、なおしにくいものである。

大体にぎり方の解かったところで、左手の人さし指で定規の右上はしのマスの位置をさわらせる。ここで点字を書くときは、右から左に向かって書いていくことを説明する。右手で点筆をにぎったまま、点筆の先を左手のひとさし指に当てさせ、マスの大きさを調べるように、マスの中を右まわりに何度もまわらせながら、次第に右上の角、右側の枠に沿って真中、右手前の角、左手前の角、左側の枠に沿って真中、左上の角、以上 6箇所にある定規の下側の凹みに、点筆がきっちりはいるように練習させる。点筆の持ち方はもう少し進んだ段階で再度調整すること。

☆注意 点筆と定規は糸でつながないよう指導すること。子供の場合は失う可能性があるが、中途失明者の大人なら、点筆入れは各自工夫せねばよい。糸でつなぐことは、用紙や指にひっかかり、思わぬ不便があり、非能率である。

9) 用紙のセット

点字器の紙押さえは閉じさせておく。点字用紙（110斤がよい）を1枚用意させて、点字器の板の上にのせて、左右どちらでも各訓練生のしやすい方に紙幅の余分を出させ、反対側を板にきっちり合わせて、合わせた側の手で動かないように固定させる。紙の余分を板の幅に合わせて、上から押さえつけるようにして、きっちり折り型をつけさせる。

☆注意 上だけ合わせて、手を滑らせるようにすると、ゆがんで手前の方の紙幅が広くなるので、その点よく注意して、丁寧に型付けをさせること。

型のついた用紙を裏返させて、型通りにきっちり折らせる。

☆注意 これも手を滑らせるようにすると、折角ついた折り型通りにならず、それてしまうので、よく注意すること。

折り目を上向きのまま、右側にして持って、点字器の紙押さえを開けて、真中のしきりいっぱいに用紙の上端を合わせ、両横は板に合わせて、ゆがんでいないかよく確認させたら、両手のひとさし指で用紙の上から針を押さえて穴を開けさせ、片手で用紙が動かないようにしっかりと押さえて、他方の手で紙押さえを閉めさせる。

10) 定規の取りつけ、および送り方

定規の右側を少し開けて、用紙の手前のはしを定規 2枚の間にはさんで、定

規はすぐ閉じて2枚そろえる。次に、両手で定規の両はしを持ち上げるようにして板から少し浮かせ、紙押さえに当たるまで進めると、第1番目の穴に固定される。

更に、両手で定規の持ち上げ方を加減させながら、一つずつ手前の穴に送る練習をさせ、7回送って八つの穴までゆずれたら、今度は最初の紙押さえのそばまで、一気に戻らせる。何回も繰り返させて左右の手の動きを揃え、また、浮かせ過ぎて溝からはみ出さないように工夫させる。

11) 用紙の裏返し練習

前項の要領で八つの穴まで定規を送らせたら、紙押さえを開けて、用紙をずっと上に抜き取らせる。抜き取った用紙はすぐ裏返させて、左手で定規の右はしを少しだけ持ち上げて、用紙を定規2枚の間に滑りこませてから定規を閉じさせる。

用紙の上方に紙押さえの針の跡があるのをさがさせて、紙の上端に近く上側にとび出している方を、両手ひとさし指で紙押さえの針にさしこませ、片手で用紙を押させて、ここで表のときしきりいっぱいであった用紙の上端が、しきりからどれだけ離れているかを、各訓練生にしっかりと確認しておくこと。そして片手で紙押さえを閉めさせ、定規を一番上の穴に戻させる。

この練習は、授業時間中に少なくとも、表返し裏返しと各3回以上繰り返させ、針の穴の数がふえていないか注意すること。

☆注意 表側の点字を書き終えて裏返しをするときに、点字板から定規をはずしてしまうくせをつけないこと。これはよく注意しないと、無意識では必ず人が多い。また、用紙を裏返してから定規にはさまないで、先に針にさそうとあせる人が多い。いずれも細かいことであるが、能率的に損をするから、はじめに意識づけしておかないと、無意識のうちにくせがつき、用紙の裏返し操作が速くならない。

単元2. 点の打ち方の基礎練習(1時間)

- 1) 六つの点の番号の説明はまだしないで、右上角、右真中、右下角、左下角、左真中、左上角の順で、1行目第1マスから全マス打たせる。点筆が倒れないか、マスが飛ばないか、真中の点が入っているか、また、肩に力がはいり過ぎていないか、手首が浮いていないかなど、不自然な打ち方や、姿勢を、見回しながらどんどん注意して行く。
- 2) きれいに揃って打てるようになった訓練生から、ひとまずとばしに打たせる。全マス打ちとひとまずあけをそれぞれ2行ずつ打たせる。
- 3) 上手に打てるようになった訓練生から、左手を定規から離させてひざの上

におかせ、右手だけで全マス打ちとひとまずあけを、今まで同様 2 行ずつ打たせる。各行の第一マスのさがし方、右手だけでの定規の送り方をアドバイスしながら、訓練生それぞれに自分のしやすい方法を工夫させる。

☆注意 この片手打ちは、写し書きの準備訓練として、なるだけ早いうちに身につけさせた方が、自習しやすく、進歩が早い。また、片手打ちをさせて定規のガチャつきの多い訓練生は点筆が垂直でない場合が多く、また、六つの点の位置が実際以上に離れた感覚でとらえられ、必要以上の力を入れている場合も多い。いずれも早いうちに意識づけをして矯正しておかねばいけない。

点筆を持つ右手の小指の第 1・第 2 関節の間で、定規の上下 2 行の間をずっとたどらせること。定規のぶれも防ぐことができるし、点の位置も狂いにくい。

単元 3. 左手読みの基礎練習（1 時間）

☆注意 各訓練生が単元 2 で打ったものを使用させるのが望ましい。ただし全マス打ちのところどころにマスとびがあったり、ひとマスあけが正確にできていない訓練生があれば、指導側から教材を与えた方がよい。

1) 行頭と行末の見分け方の説明

点字器で打ったものは、用紙の折り目を左側下向きにして、左側が行頭、右側が行末である。

亜鉛原板で一枚刷りをした教材の場合は用紙に折り目がないので、まず左手は用紙の左はし寄り、右手は用紙の右はし寄りを、上から下に縦に手を動かして、大体そろっている方が行頭であるから、もし右手できわった方がそろっていれば、用紙を 180 度回さないといけない。

☆注意 余白の幅の大小で一枚刷りの上下左右を覚えさせてはいけない。

2) 点のさわり方

姿勢をよくして、右手のひとさし指で 1 行目の行末をさわらせる。左手は用紙の縦と平行にして、指は軽く自然にまげて、5 本とも用紙に触れさせる。肩から指先まで意識して力を抜くように注意をする。その状態で 1 行目の行頭にひとさし指をさわらせる。ひとさし指は、点の高さだけ紙面より浮かせて、点の頭だけ軽くふれるようにして、左から右へ滑らせるようにさせる。全マス打ちの行であるから、ひとマスの大きさにこだわらないように注意して、1 行目の行末（右手ひとさし指のところ）まで移動したとき、ストップさせて、左手及び左ひとさし指の角度が変わっていないかを確かめて意識づけておくこと。

3) 行の変え方

さわり終わった行と次の行の間を左端行頭まで戻ればよいのだが、さわり終

わった行の一番下の点（3と6の点）をかすかに触れる感じで戻るのがよい。また、小指、くすり指、中指の3指で上手に誘導させれば、行頭を通過してしまって見失うような失敗が少ない。

行頭まで戻って次の行に移ったとき、右手のひとさし指も次の行の行末に移動させる。

この2)と3)を、片面16行くりかえさせて、左手と右手の動きをなるだけ自然に、そして肩に力がはいらないかどうか、また、ひじをはり過ぎないかどうか、用紙がゆがんで来ないかどうか、左手の角度が変わらないかどうか、よく注意して見てまわること。

4) マス幅に合わせた左手の動き方

1枚刷りの教材（No.1）を与える。2行目の「メ」のひとまずおきの行をさわらせて、6つの点が全部打ってある字が、「メ」であることを説明抜きで教えて、ひとマスの大きさをよく認識させる。指を縦に動かさない方がよい。6つの点全部のかたまりとして認識させること。

次に隣のマスに指を移動させるが、真横に動かすよう注意すること。点の打っていないマス、つまりひとまずあけの幅をよく認識させる。

もう一度行頭に戻らせてから、1、2、3、4、5、と、秒針に合わせるぐらいの速度で32まで数えて、それに合わせてひとさし指を行末まで移動させる。奇数のときはメの上に指があり、偶数のときはますあけのところに指があるように、きっちりひとマスずつ指及び左手全体が移動できるようにさせる。要領としては、ひとさし指がそのマスを確認している間に、他の4本の指もちょうどひとマス分移動させる、というふうに、半テンポおくれて支え合えば、楽に左手全体がスムーズに規則的な移動ができる。

3行目は、「メ」が2マス並んで、ひとマスあけのくりかえしである。同じテンポで左手の移動をさせる。1から32のうち、3の倍数のときにちょうどマスがあいているところに指がのればよい。

4行目は、「メ」が5マス並び、ひとマスあけのくりかえしである。6の倍数のときにますあけの位置に指があればよい。

訓練生全体を考慮しながら、スムーズな動きのできない訓練生があれば、2行目に戻って調子づければよい。ある程度指の動き、手の動きがよくなれば、1行目の全マス「メ打ち」を、同じテンポで数えて32を数え終わるまでにマスのなくなった訓練生、32を数え終わってもまだ「メ」の残っている訓練生、それぞれに自分の動きと、マス巾とのずれを確認させる。

このマス幅に合わせた左手全体の動きということは、触読の基礎でもっとも大切で、今後も折あるごとに、訓練生各自の自習を促した方がよい。

タイトル

•

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17

図 1. 教材 (No. 1)

単元4. 写し書きの基礎練習（1時間）

1) 点字板に用紙をセットさせて、右手に点筆をにぎらせて、行の最初のマスをさがさせる。

教材（No.1）を点字板の左へ並べておかせて、左手だけで左はしの行頭を上から3行目まで数えさせる。

左ひとさし指で、まず「メ」を1、2と数えて3マス目のマスあけまできたらそこでストップして、右手で「メ」を1、2と二つ書いてその次はひとまずあける。要するに、左手は「メ」の数を数えてマスあけまで行って止まり、右手でその数だけ「メ」を書いてひとマスあけるというのを行末までくりかえさせる。

教材（No.1）の4行目も同じ要領で練習させる。

2) 教材（No.1）の5行目は、「メ」の数が不規則になっているが、同じ要領で3回以上練習させる。必ず見てまわり、合っているか、また、どこがちがっているかを、裏返させて各訓練生に確認させる。そのさい、マスあけのところも注意して、点筆でさわった型をつける訓練生がいれば、その点をよく注意しておくこと。

単元5. 6点の名称と、位置関係（2～3時間）

1) 6つの点の呼び方を説明する。読むとき、即ち左手では、先にさわる左側が、上から1の点、2の点、3の点であり、書くとき、即ち右手では、先に点を打つ右側が、上から1の点、2の点、3の点であること。次に、1の点の隣が4の点、2の点の隣が5の点、3の点の隣が6の点であるというように、隣同志横に並んだ二つずつを対にして覚えさせること。両手を机の上に出させてそれぞれひとさし指で、1、4、2、5、3、6と、外から中心へ移動させる。右手は書き、左手は読みの形で何度も机の上で書かせる。1、6とか、2、4とか、3、4などと同じ要領で、両手対称的に動くようになるまで続ける。

2) 左ひとさし指の6点の触読位置

教材（No.1）の6行目をさわらせる。最初の「メ」を確認させてから、指を真横に移動させ、次のマスがどうなっているかを訓練生全員に言わせてから正解を教え、更にその2・5の点が次の「メ」まで何マス並んでいるかも全員に言わせる。同じ要領で行末まで全員で確認できたら、この行も3回以上写し書きをさせる。

この6行目のねらいは、触読指に6点を横3本の線としてとらえさせることにあり、またその3本の横線が、それぞれ触読指の定まった位置に当たるような指の移動の仕方を覚えさせることにある。

同時に、マスの中に 6 点がそろっていない場合でも、左手全体がマス巾に合った移動ができるようになることが大切なので、訓練生各自で自由に教材を作り、1・4 だけでも 32 マス数えられるように自習を促すこと。

3) よみと書きの対応

教材(№1)の 7 行目以下を使用する。

写し書きの時のように、右側に点字板をいつでも書けるように用意させ、点筆もにぎらせておく。

左手は、ひとマスずつ「メ」を確認させながら 6 マス目まで移動したときに、何か感じたことはないか尋ねる。上方にすきまがある、とか、1 の点がない、とか、4 の点がないなど、数人が答えてから、5 マス目の側、つまり 1 の点がぬけていることを確認させ、左手はそこに固定させたまま、1 の点抜きの字をひとマスあけで 1 行書かせる。自由に書かせて見まわりながら、途中から、3・2・4・5・6 の順で点を打つように指示し、2 から 4 に点筆を動かすときに、1 の点を通らずにななめに点筆を動かすように工夫させる。

1 行打ち終わったら、右手は次の行の行頭で待たせる。

全員そろったら左手でマスあけ二マスを確認させ、次の「メ」を五つ数えて六つ目の抜け点を聞き、皆で確認できれば、ひとマスあけで 1 行書かせる。ずっとこの要領で授業を進めていく。

☆注意 左手の動きにあせりを出させないこと。抜け点が分かりにくい訓練生には、触読指をマスあけまでもどらせてやり直させること。また、6 マス目では少しぐらいの触読指の縦振りをすすめてもよい。しかしながら 5 マス目から 6 マス目に移動した瞬間の印象を大切にすること。

教材(№1)の 13 行目のときに、まず抜け点を言わせてから、点が 3 点以下の場合は、どこに点があるかをさがす方が能率的であることをアドバイスして、以下点のある方を答えさせること。16 行目まで。

☆注意 一応前者のマイナス読み、後者のプラス読みの使い分けに慣れさせること。

☆注意 右手で書かせるときには、常に抜く点をさわらせないようにするこが大切である。例えば、2 の点抜きのときの書き順は、1 4 5 6 3。5 の点抜きは、4 1 2 3 6。1 と 4 抜きは、3 2 5 6 という要領。どの点からでも書けるようにし、また、右まわりでも左まわりでも書けるように訓練しておくこと。

点のずれが完全になくなるまで、次の単元に進めないこと。

単元 6. 1マス1字(50音、撥音、長音、促音)の書き方・読み方 (15~17時間)

1) 母音

母音の説明前に、先ず1の点をひとマスおきに1行書かせ、次に、1と2の点をひとマスおきに1行、1と4の点をひとマスおきに1行、そこで、1行目が「ア」、2行目が「イ」、3行目が「ウ」であることを言って、次の「エ」に移る。「エ」は4・1・2の順で書かせ、同じくひとマスおきで1行、「オ」は、4・2の順で、1の点をさわらざに斜めに点筆を移動させて、やはりひとマスおきに1行書かせる。各自書いたものを点字板からはずさせて、それをいっしょに読ませながら、母音の説明をする。

母音は6点のうち上半分、即ち1の点とその下の2の点、1の横の4の点の3点の組み合わせで構成されていること。

母音を完全に読みわけられたら、50音の3分の1をマスターしたことになるほど大切であることを強調しておくこと。

☆注意 ルイ・ブライユの配列は、「数字」にはいる時の方がよい。また、石川倉次先生の翻案の説明も、同じときの方が、訓練生に余裕ができるので、効果的である。

「ア」の行を読ませながらその特徴を確認させる……1の点が孤立していて、下も横も空いている。

「イ」の特徴……縦に長いが、4の点がないから細い感じである。

「ウ」の特徴……2の点がないから指がそのマスにはいるときは、「ア」とよく似ているが、マスの上に指をのせてしまうと、上の幅が広い。

「エ」の特徴……1の点の下にも横にも点があるため、角ががっちりしたかたまりの感じである。幅も長さもある。

「オ」の特徴……母音の中で、この字だけが1の点がない。指の動きができるれば、1の点のないのがよくわかるはずである。2の点から4の点へ尻上がりのななめにも気をつけること。

各行16この字をゆっくりさわらせながら、以上の説明をしていく。全員が納得できたら、もう一度用紙を板につけさせて、次の行に、「アイウエオ」をひとマスおきで、3回かかせる。裏返して確認させる。

次に教材(№2)を使用して、1行目から2行目にかけての、前後に「メ」を続けた「アイウエオ」で、更に特徴をつかませる。続けて3行目のよみ、及び、写し書き。書き取り。「ウエ」「イエ」「ウォ」「アイ」「アオ」など、それぞれ1行ずつ。

2) 規則的な子音のうち「カ・ナ・ハ行」

| タイトル | 音節 |
|------|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 1 | ff |
| 2 | ff |
| 3 | ff |
| 4 | ff |
| 5 | ff |
| 6 | ff |
| 7 | ff |
| 8 | ff |
| 9 | ff |
| 10 | ff |
| 11 | ff |
| 12 | ff |
| 13 | ff |
| 14 | ff |
| 15 | ff |
| 16 | ff |
| 17 | ff |

図2. 教材(No.2)

母音は定位置で、3・5・6の点をいくつかプラスすることにより構成される7行のうち、5の点のはいらない3行を先にする。

「カ、キ、ク、ケ、コ」それぞれひとマスおきで1行ずつ5行書かせて、それを丁寧にさわって確認させ、そのあと、教材(No.2)4~6行、よみと写し書き。

「ナ、ニ、ヌ、ネ、ノ」も同様の順で、教材(No.2)の7~9行、よみと写し書き。

そのあと、教材(No.2)の10~16行は、2字の単語、17行は3字、5字の語句であるが、各訓練生に、1単語ずつ読ませ、全部読み終えてから写し書きをさせる。そのさい、1マスあけ、2マスあけを正確に写せること。

カ行とナ行の見分けは、母音と同時にさわればナ行、あとからさわればカ行だということを、よく意識づける。

各訓練生の読み分けにくい字を、2文字ずつ、交互に1マスおきに書かせて、よくさわらせ、ちがいを納得させること。

ハ行も同じような要領で、教材(No.3)の1~5行を使用して進める。4・5行目は写し書きもさせること。

☆注意 それぞれの字を、母音プラス子音の点で覚えさせること。例えば、「ケ」は1・2・4・6ではなく、「エ」に6の点というふうに言わせること。

☆注意 「オ」の列は、特に1の点がないことを印象づけること。これは、左右転倒の防止になる。

☆注意 中途失明者、特にまだ視力の残っている訓練生には、字を形として視覚的に描かないように、再三注意しておかないと、左右転倒のくせがつきやすい。

3) 5の点のはいった規則的な子音

ラ行は、母音プラス5の点。

マ行は、ハ行プラス5の点。

サ行は、カ行プラス5の点。

タ行は、ナ行プラス5の点。

それぞれ5の点のありなしに意識して対応させながら、教材(No.3)の6行目から教材(No.4)の11行目までを使用して、進めること。

ここで一度整理をしておくとよい。

カ行とサ行には、3の点がない。

タ行とナ行には、6の点がない。

3と6の点がそろえば、ハ行かマ行。

	Piano Solo								
1	B1	C1	B1	D1	E1	C2	D2	E2	C3
2	B2	C2	C	D	E	C	D	E	C
3	C	C	C	C	C	A	A	A	A
4	A	A	A	A	A	A	A	A	A
5	A	A	A	A	A	A	A	A	A
6	B3	C3	B3	D3	E3	B3	D3	E3	B3
7	B3	C3	B3	D3	E3	B3	D3	E3	B3
8	A	A	A	A	A	A	A	A	A
9	A	A	A	A	A	A	A	A	A
10	A	A	A	A	A	A	A	A	A
11	B3	C3	B3	D3	E3	B3	D3	E3	B3
12	B	B	B	B	B	B	B	B	B
13	B	B	B	B	B	B	B	B	B
14	B	B	B	B	B	B	B	B	B
15	B	B	B	B	B	B	B	B	B
16	B	B	B	B	B	B	B	B	B
17	B	B	B	B	B	B	B	B	B

図3. 教材(No.3)

1	80	78	86	96	87	78	89	98				
2	84	48	1	8	7	8	4	1	5	7	9	6
3	9	7	4	5	6	8	4	6	7	9	4	
4	7	7	1	7	5	6	7	6	9	6	4	
5	5	1	1	6	4	7	5	1	9	1	3	
6	4	8	7	3	1	5	6	4	5	5	8	
7	80	78	86	96	87	78	89	98				
8	87	78	1	8	7	8	4	1	5	7	9	
9	5	8	1	8	7	8	4	6	7	9		
10	4	8	1	8	7	8	4	6	7	9	1	
11	1	8	1	8	7	8	4	6	7	9	1	
12	8.	78	86	96	87	78	89	98				
13	8.	1	8	7	8	4	6	7	9			
14	1	8	1	8	7	8	4	6	7	9		
15	1	8	1	8	7	8	4	6	7	9		
16	1	8	1	8	7	8	4	6	7	9	1	
17	1	8	1	8	7	8	4	6	7	9	1	

図4. 教材(No.4)

タイトル	解説	図
1	「」「」「」「」「」「」	
2	「」「」「」「」「」「」	
3	「」「」「」「」「」「」	
4	「」「」「」「」「」「」	
5	「」「」「」「」「」「」	
6	「」「」「」「」「」「」	
7		
8	「」「」「」「」「」「」	
9	「」「」「」「」「」「」	
10	「」「」「」「」「」「」	
11	「」「」「」「」「」「」	
12	「」「」「」「」「」「」	
13	「」「」「」「」「」「」	
14	「」「」「」「」「」「」	
15	「」「」「」「」「」「」	
16	「」「」「」「」「」「」	
17	「」「」「」「」「」「」	

図 5. 教材(No. 5)

3も6もなければ、母音かラ行。

4) 母音を移動した特殊な行、及び、撥音

母音を同型のまま、可能な限り下にずらせたワ行と、その下がり母音に子音の点として4の点をプラスしたヤ行を、教材（No.4）の12行、13行を使用して説明する。

ヤ行の特徴は、1と2の点があいていることと、下がった母音の3の点が先ず先に指にさわることである。

ワ行での注意は、左ひとさし指の動きを安定させること。1・2・4の点がないのを早く見分けること。

おしまいの「ン」は、構成上ではワ行やヤ行と全然異り、母音のない字、つまり、6点から1・2・4を除いた3・5・6だけの字であるが、よみの特徴としては、ワ行と同様なので、教材（No.4）の13行で、ワ行の続きを説明してさわらせる。

教材（No.4）14～17行のよみをしながら、助詞の「は」に点字では「ワ」を使うこと。「ヲ」は助詞にしか使わないこと。同様、助詞の「へ」にも点字では「エ」を使用することを、説明しておくこと。

5) 50音の整理、及び、長音・促音

単語の書き取り。まちがいをよく評価すること。单なる点のすれば、点筆の角度を再度注意すること。左右転倒があったり、各行の子音の点が整理されていない場合は、ゆっくり時間をかけなくてはいけない。教材（No.5）1～6行の写し書きを何度もくりかえさせること。各行暗記させて、特徴もきっちり意識させること。

教材（No.5）の7行目があいたあと、8～17行目では、50音各行1マスおきと、5字連続を読ませながら、アの列とイの列には4の点がないこと、ウの列とエの列は区別がつけにくいが、オの列は1の点がなく、他と区別しやすいことを、はっきり確認させる。

17行目の「ワ・ヲ・ン」のあと、その3字と点の位置を比較させながら、長音と促音の使い方を説明する。

以上で、1マス1字の記号は完了である。

6) よみの練習、及び写し書きと、評価

教材（No.6）を配り、訓練生1人1行ずつ、同じ行を2、3人くりかえし読ませて、確認させる。全行確認させてから、写し書きをさせる。評価は各本人に確認させながら行い、各自の弱点を自覚させるのが大切である。

左指の角度が安定していない場合は、1・3・4行にまちがいが多い。

マス幅の動きが不安定な場合は、1・5行目のまちがいが多い。

タイトル　P.2.4.1.2.3

• • •

図 6. 教材 (No 6)

教材番号	題名	内容	解説						
1	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」
2	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」
3	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」
4	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」
5	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」
6	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」
7	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」
8	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」
9	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」
10	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」
11	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」
12	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」
13	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」
14	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」
15	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」	「」

図 7. 教材 (No. 7)

左指を縦に動かし過ぎる場合は、7行目のまちがいが多い。
左右転倒しやすい場合は、3・4・6・8・9・10行目にまちがいが多い。
点を押さえ過ぎる場合は、7・8・9・11行のように点の多い字がよみにくく
い。

7) 単語よみ練習

教材(№7)のよみ。1人1単語ずつよませる。全部よめたら写し書きをさ
せる。

8) 単語書き取り

適宜聞き書きをさせる。あと順次読ませる。長音・促音の使い方も練習させ
た方がよい。

☆注意 字をまちがえたり、いらない点がはいってしまったとき、ミスった
マスから3つ「メ」を並べて書き直させる。慣れるまでは点をつぶし
て訂正するのはさせない方がよい。

単元7. 2マス1字(濁音・半濁音・拗音・拗濁音・拗半濁音)の書き方、 よみ方(5~7時間)

1) 指示記号先行の特色の説明

視覚文字とちがい、触覚文字である点字は、50音以外の文字の種類を示す記
号を、文字より先に触知できるように、前置させるという特色を説明しておく。

2) 濁音

教材(№8)の1~4行を使用して、濁点(5の点とも呼ぶ)と「カ」をつ
づけて書けば、その2マスで「ガ」になることを説明し、5の点さえ読み分け
ればその次のマスには、「カ、サ、タ、ハ」の4行、20字しかないことを覚え
させる。

☆注意 2マス1字の文字は、必ず続けて書かないといけないこと。また前
置記号と本体の文字との間に、メ消しを入れてはいけないこと。行末
に濁点を書いて次の行に本体の文字を書いてはいけないこと。

「ガ」と「オワ」、「ブ」と「コナ」など、読みの似ている語を書かせて、
読みくらべさせる。各自工夫していろいろ読みくらべて納得するよう自習を
促すこと。

3) 半濁音

教材(№8)の6行目で、半濁点(6の点とも呼ぶ)と「ハ行」の文字で半
濁音の5文字を説明する。各文字6・3・6と下に3点並んでいることを意識
させる。

4) 拗音

題	題	題	題	題	題	題	題	題	題
1	△	△	△	△	△	△	△	△	△
2	△	△	△	△	△	△	△	△	△
3	○	○	○	○	○	○	○	○	○
4	△	△	△	△	△	△	△	△	△
5									
6	△	△	△	△	△	△	△	△	△
7									
8	○	○	○	○	○	○	○	○	○
9	○	○	○	○	○	○	○	○	○
10	○	○	○	○	○	○	○	○	○
11									
12	○	○	○	○	○	○	○	○	○
13	○	○	○	○	○	○	○	○	○
14									
15	○	○	○	○	○	○	○	○	○

図 8. 教材 (No. 8)

拗音は教材をさわらせる前に、構成をよく説明しなければいけない。

「ヤ行」の子音を表す4の点を先ず前置させ、次のマスに「ヤ行」の母音を正位置に書き、同じマスにその音の子音を足す、という3段階に分けた構成を説明し、もしそれが理解できない訓練生には、4の点の前置と、「カサタナハマラ」各行の「ア列・ウ列・オ列」を、すみ字の場合の小文字である「ヤ・ユ・ヨ」と母音を合わせて書けばよいというふうに、各訓練生が、すみ字と対応して納得できるまで説明する。

教材(No.8)の8~10行をさわらせながら、7行3文字ずつ21文字、特に母音の、「ア・ウ・オ」の見分けを重点にさわらせること。

5) 拗濁音・拗半濁音

拗音を表す4の点と、濁点・半濁点がそれぞれ同じマスに書かれて、前置される指示記号がダブることを説明する。

教材(No.8)の12~13行で「カサタハ」各行の12文字が拗濁音であり、15行の「ハ行」3文字だけが、拗半濁音であることを覚えさせる。

6) 2マス1字の読みの基礎練習

教材(No.9)の1~5行を使用して、指示記号の4・5・6の点の見分け方を練習させる。

教材(No.9)の7~12行を使用して、左手の動き、特に半マスあきと、1マスあきの見分けを練習させる。9~12行は、各訓練生が完全にできるまで、写し書きをさせる。

教材(No.9)の14~17行のよみ練習。

単元8. 単語・單文の書きと読み(6~8時間)

1) 提出時の氏名の書き方

1行目の行末(左はし)から各訓練生の氏名に必要なマス数プラス1マス右に戻らせ、そこから書きはじめて、苗字と名前の間を1マスあけて、きっちり行末で終わるように練習させる。自分の氏名を書きまちがえた場合は、全部メ消しにして、次の行に書き直させる。

2) 単語の書き書き

促音・長音も含めていろいろな熟語を聞き書きさせる。各単語の間は2マスあけさせる。また、一つの単語が行末から次の行頭にまたがってはいけないと説明し、左手を使用させないで、点筆を握っている右手の親指で、残りマス数を調べさせる練習をさせること。

☆注意 氏名を書くときも、残りマスを調べるときも、数を数えるような2度手間のくせはつけさせないで、直接言葉なり氏名をマスに当てはめ

タイトル	日本語	英語
1	おのれの身のまわり	My surroundings
2	おのれの身のまわり	My surroundings
3	おのれの身のまわり	My surroundings
4	おのれの身のまわり	My surroundings
5	おのれの身のまわり	My surroundings
6		
7	おのれの身のまわり	My surroundings
8	おのれの身のまわり	My surroundings
9	おのれの身のまわり	My surroundings
10	おのれの身のまわり	My surroundings
11	おのれの身のまわり	My surroundings
12	おのれの身のまわり	My surroundings
13		
14	おのれの身のまわり	My surroundings
15	おのれの身のまわり	My surroundings
16	おのれの身のまわり	My surroundings
17	おのれの身のまわり	My surroundings

図 9. 教材 (No. 9)

て行く要領を覚えさせること。

☆留意点

- (1) まちがったときの「メ消し」が丁寧にできるように、きびしく注意する。
- (2) 長音・促音が上手に使えるように、言葉のリズムとか、方言に注意する。

3) 単文の聞き書き

中学生用の書き取りドリルを使用して聞き書きさせる。次のことをその都度説明しながら、マスあけごとに区切って読み、全員が書けるのを待って次を読むこと。書きまちがいは丁寧に「メ消し」させる。

☆説明事項

- (1) 文の最初は行頭 2 マスあけて、3 マス目から書くこと。
- (2) 助詞のかなづかい。
- (3) 母音と長音の使い分け。
- (4) 促音と「ツ」の使い分け。
- (5) 文の最後は必ず句点(2・5・6の点)を書かせる。
- (6) 短文なので、句点のあとは行を変えて、3 マス目から次を書く。

4) 短文の読みと写し書き

教材(№10)のよみと写し書き

☆留意点

- (1) 句点に注意させる。
- (2) 2 マスあけに気付かない場合、また、その他マスあけのまちがいは、必ず本人の書いたのと教材とを、指で比較させて気付かせること。
- (3) 全てまちがいは、箇所を指摘せずにその文章をもう一度読み直させて気が付くまでやり直させること。

5) 単語の読みと写し書き

教材(№11・12)を、1人1単語ずつ順番に読ませ、あと写し書きをさせる。

☆注意 この単元以後、文章の聞き書きは週に1度は行い、順次長い文章にする。マスあけごとに区切って読むこと。

単元9. 数字と算数記号(4~6時間)

1) ルイ・ブライユの配列

点字の歴史を簡単に説明し、ルイ・ブライユの配列と、石川倉次の日本点字への翻案の説明をする。

その後、ルイ・ブライユの配列の基礎である「アイウルラエレリオロ」を

タイトル　　教材（No.10）

- 1　　「人、社会、文化」
- 2　　「人、社会、文化」
- 3　　「人、社会、文化」
- 4　　「人、社会、文化」
- 5　　「人、社会、文化」
- 6　　「人、社会、文化」
- 7　　「人、社会、文化」
- 8　　「人、社会、文化」
- 9　　「人、社会、文化」
- 10　「人、社会、文化」
- 11　「人、社会、文化」
- 12　「人、社会、文化」
- 13　「人、社会、文化」
- 14　「人、社会、文化」
- 15　「人、社会、文化」
- 16　「人、社会、文化」

図10. 教材(No.10)

タイトル フル名 テーマ

1. 朝の風景と朝日と朝雲
2. 朝の風景と朝日と朝雲
3. 朝の風景と朝日と朝雲
4. 朝の風景と朝日と朝雲
5. 朝の風景と朝日と朝雲
6. 朝の風景と朝日と朝雲
7. 朝の風景と朝日と朝雲
8. 朝の風景と朝日と朝雲
9. 朝の風景と朝日と朝雲
10. 朝の風景と朝日と朝雲
11. 朝の風景と朝日と朝雲
12. 朝の風景と朝日と朝雲
13. 朝の風景と朝日と朝雲
14. 朝の風景と朝日と朝雲
15. 朝の風景と朝日と朝雲
16. 朝の風景と朝日と朝雲

図1.1. 教材(No.1.1)

タイトル	発行年	著者名	出版社
1	「日本」の歴史	吉川弘文館編	吉川弘文館
2	「日本」の歴史	吉川弘文館編	吉川弘文館
3	「日本」の歴史	吉川弘文館編	吉川弘文館
4	「日本」の歴史	吉川弘文館編	吉川弘文館
5	「日本」の歴史	吉川弘文館編	吉川弘文館
6	「日本」の歴史	吉川弘文館編	吉川弘文館
7	「日本」の歴史	吉川弘文館編	吉川弘文館
8	「日本」の歴史	吉川弘文館編	吉川弘文館
9	「日本」の歴史	吉川弘文館編	吉川弘文館
10	「日本」の歴史	吉川弘文館編	吉川弘文館
11	「日本」の歴史	吉川弘文館編	吉川弘文館

図12. 教材(No.1~2)

暗記させる。

2) 数字の書き方

数符の説明。書き順は「3・6・5・4」と書かせること。

数字1～100まで書かせる。数符と「ロ」は0であり、10は数符と「アロ」と書くこと、及び、11は数符と「アア」であって、数符に「アロア」と書けば101になってしまうことを注意させること。

1、2、3、それぞれの間は1マスあけでよい。もしまちがえば、その数の数符から「メ消し」をして、1マスあけて数符から書き直せること。

1つの数を2行にまたがらせないこと。

3) 数字の読み方と、算数記号

教材(№13・14)を使用して、順次説明をする。

数字は先ず何桁の数であるかを、先にさわってみてからよむこと。

助数詞は続けて書くこと。

つなぎ符の使い方の説明。

小数点以下、簡単な計算に必要な記号を順次説明しながらさわらせる。

止むなく使用した特殊音「フィ」を、アポストロフィを読むとき、一応説明しておく。

4) 読み練習

教材(№15)の簡単な計算をさせる。問題をそのまま写して、イコールのあとに続けて答を書くこと。

5) 数字のまざった短文の聞き書き。

単元10. アルファベット、特殊音(4～6時間)

1) アルファベットと、英文記号

教材(№16)を使用。止むなく使用した特殊音「ファ」を説明すること。

外字符と、外国語引用符の使い分けを、説明すること。

大文字符と、2重大文字符の説明。

句切り符号の説明。

2) ローマ字

教材(№17・18)を配り、ヘボン式であることを言って読みの練習。

止むなく使用したカッコも説明しておくこと。

3) 数量単位の略号

教材(№19)を使用して順次説明。

円周率のところで、ギリシャ文字の前置記号、及び必要ならミクロンなども教えておくとよい。

タイトル

2

図 13. 教材 (No. 13)

タイトル　Furphy's Cuckoo-shrike
J. R.

1 <Gulliver's Travels> J. R. FOLKLORE
2 Gulliver's Travels J. R. FOLKLORE
3 J. R. FOLKLORE
4
5 Gulliver's Travels J. R. FOLKLORE
6 Gulliver's Travels J. R. FOLKLORE
7 Gulliver's Travels J. R. FOLKLORE
8 Gulliver's Travels J. R. FOLKLORE
9 Gulliver's Travels J. R. FOLKLORE
10 Gulliver's Travels J. R. FOLKLORE
11
12 Gulliver's Travels J. R. FOLKLORE
13 Gulliver's Travels J. R. FOLKLORE
14 Gulliver's Travels J. R. FOLKLORE
15 Gulliver's Travels J. R. FOLKLORE
16 Gulliver's Travels J. R. FOLKLORE
17 Gulliver's Travels J. R. FOLKLORE

図 1 4. 教材 (No 1 4)

卷之三

	Initial Value
1	$J^{\alpha} \cdot J^{\beta} \cdot J^{\gamma} \cdots$
2	$J^{\alpha} \cdot J^{\beta} \cdot J^{\gamma} \cdots$
3	$J^{\alpha} \cdot J^{\beta} \cdot J^{\gamma} \cdots$
4	$J^{\alpha} \cdot J^{\beta} \cdot J^{\gamma} \cdots$
5	$J^{\alpha} \cdot J^{\beta} \cdot J^{\gamma} \cdots$
6	$J^{\alpha} \cdot J^{\beta} \cdot J^{\gamma} \cdots$
7	$J^{\alpha} \cdot J^{\beta} \cdots$
8	$J^{\alpha} \cdot J^{\beta} \cdots$
9	$J^{\alpha} \cdot J^{\beta} \cdots$
10	$J^{\alpha} \cdot J^{\beta} \cdot J^{\gamma} \cdots$
11	$J^{\alpha} \cdot J^{\beta} \cdot J^{\gamma} \cdots$
12	$J^{\alpha} \cdot J^{\beta} \cdot J^{\gamma} \cdot J^{\delta} \cdots$
13	$J^{\alpha} \cdot J^{\beta} \cdot J^{\gamma} \cdot J^{\delta} \cdots$
14	$J^{\alpha} \cdot J^{\beta} \cdot J^{\gamma} \cdots$
15	$J^{\alpha} \cdot J^{\beta} \cdot J^{\gamma} \cdots$
16	$J^{\alpha} \cdot J^{\beta} \cdot J^{\gamma} \cdots$

図 15. 教材 (No. 15)

4) 特殊音

教材 (No.20) を使用して、特殊音の発音はローマ字で、またすみ字の場合の書き方も同時に説明しておく。

5) 文章聞き書き

適当に、数字、アルファベット、特殊音などのまざった文章を、聞き書きさせる。

単元 11. 文章記号と文章を書くときの諸注意 (6 ~ 9 時間)

1) 文章記号

教材 (No.21・22) を使用して、順次使い方を説明する。他の記号と併用する場合や、前後のマスのあけ方も説明すること。

2) マスあけの仕方

教材 (No.23) を使用して、いろいろ例をあげながら説明すること。ただしあせらずに、今後何回でも機会あるごとに聞き書きの反復練習で、次第に理解させ、習慣づけるようにする。

3) 文の書きかた

教材 (No.24) を使用して、復習のような形で、確認させる。

4) 文章中の数字の書き方

教材 (No.25・26) を使用して、よく説明すること。

5) かなづかい

教材 (No.27・28) を使用して、現代かなづかいと対応させながら説明すること。

和語と漢語の説明もした方がよい。

6) 手紙の書き方

すみ字と点字の読みのちがいを再認識させた上で、点字の手紙は、宛名と日付けと差出人の名前を、必ず最初に書かなければいけないことをよく説明すること。

各訓練生に表面だけの短い手紙を書かせたあと、裏返させて、折り線を入れさせ、折りかたもさせる。

☆注意 点字板に合わせて折ったところをのばさないこと。点字を守るためにそのままにしてしっかりさせるのがよい。

教材 (No.29) を渡し、よく読んで参考にさせる。

1 *Pu-9* *1000* *1000*
 2 *Pu-9* *1000* *1000*
 3 *C* *B* *C* *B* *C* *B* *C* *B*
 4 *C* *B* *C* *B* *C* *B* *C* *B*
 5 *C* *B* *C* *B* *C*
 6 *Pu-9* *Pu-9* *1000* *1000*
 7 *C* *B* *C* *B* *C* *B* *C* *B*
 8 *C* *B* *C* *B* *C* *B* *C* *B*
 9 *Pu-9* *Pu-9* *1000* *1000*
 10 *C* *B* *C* *B* *C* *B* *C* *B*
 11 *C* *B* *C* *B* *C* *B* *C* *B*
 12 *C* *B*
 13 *Pu-9* *1000* *1000*
 14 *C* *B* *C* *B* *C* *B*
 15 *C* *B* *C* *B* *C*
 16 *C* *B* *C* *B* *C*
 17 *C* *B* *C* *B* *C* *B*

図 16. 教材 (No. 16)

教材 No. 17

17

1	ス	ル	ル	ル	ル
2	ス	ル	ル	ル	ル
3	ス	ル	ル	ル	ル
4	ス	ル	ル	ル	ル
5	ス	ル	ル	ル	ル
6	ス	ル	ル	ル	ル
7	ス	ル	ル	ル	ル
8	ス	ル	ル	ル	ル
9	ス	ル	ル	ル	ル
10	ス	ル	ル	ル	ル
11	ス	ル	ル	ル	ル
12	ス	ル	ル	ル	ル
13	ス	ル	ル	ル	ル
14	ス	ル	ル	ル	ル
15	ス	ル	ル	ル	ル
16	ス	ル	ル	ル	ル

図 17. 教材 (No. 17)

タイトル	第1回	第2回	第3回
1	130	130	130
2	130	130	130
3	130	130	130
4	130	130	130
5	130	130	130
6	130	130	130
7	130	130	130
8	130	130	130
9	40	40	40
10	130	130	130
11	130	130	130

図 18. 教材(No.18)

タイトル フルカラーテキスト

JPG

- 1 おはようございます
- 2 おはようございます
- 3 おはようございます
- 4 おはようございます
- 5 おはようございます
- 6 おはようございます
- 7 おはようございます
- 8 おはようございます
- 9 おはようございます
- 10 おはようございます
- 11 おはようございます
- 12 おはようございます
- 13 おはようございます
- 14 おはようございます
- 15 おはようございます
- 16 おはようございます
- 17 おはようございます

図 19. 教材(No.19)

1	おおきい
2	うさぎ
3	うさぎ
4	うさぎ
5	うさぎ
6	うさぎ
7	うさぎ
8	うさぎ
9	うさぎ
10	うさぎ
11	うさぎ
12	うさぎ
13	うさぎ
14	うさぎ
15	うさぎ

図 20. 教材 (No. 20)

教材 No. 21

1. おはようございます
2. おはようございます
3. おはようございます
4. おはようございます
5. おはようございます
6. おはようございます
7.
8. おはようございます
9. おはようございます
10. おはようございます
11. おはようございます
12. おはようございます
13. おはようございます
14. おはようございます
15. おはようございます

図 2.1. 教材 (No. 21)

タイトル フジ・シ・ノ・シ・ツ・ル・シ・テ
JPS

1. フジ・シ・ツ・ル・シ・テ
2. ノ・シ・ツ・ル・シ・テ
3. ノ・シ・ツ・ル・シ・テ
4. ノ・シ・ツ・ル・シ・テ
5. フジ・シ・ツ・ル・シ・テ
6. ノ・シ・ツ・ル・シ・テ
7. ノ・シ・ツ・ル・シ・テ
8. ノ・シ・ツ・ル・シ・テ
9. ノ・シ・ツ・ル・シ・テ
10. ノ・シ・ツ・ル・シ・テ
11. ノ・シ・ツ・ル・シ・テ
12. ノ・シ・ツ・ル・シ・テ
13. ノ・シ・ツ・ル・シ・テ
14. ノ・シ・ツ・ル・シ・テ
15. ノ・シ・ツ・ル・シ・テ

図 2.2. 教材 (No.2.2)

教材 No. 23

23

1. うつむきのままで、左の手を右の手の上に置く。
2. 左の手を右の手の上に置く。右の手を左の手の上に置く。
3. 右の手を左の手の上に置く。左の手を右の手の上に置く。
4. 左の手を右の手の上に置く。右の手を左の手の上に置く。
5. 右の手を左の手の上に置く。
6.
7. 左の手を右の手の上に置く。右の手を左の手の上に置く。
8. 右の手を左の手の上に置く。
9. 左の手を右の手の上に置く。右の手を左の手の上に置く。
10. 左の手を右の手の上に置く。右の手を左の手の上に置く。
11. 左の手を右の手の上に置く。右の手を左の手の上に置く。
12. 左の手を右の手の上に置く。右の手を左の手の上に置く。
13. 左の手を右の手の上に置く。
14. 左の手を右の手の上に置く。右の手を左の手の上に置く。
15. 左の手を右の手の上に置く。

図 23. 教材 (No. 23)

タイトル フル・カーボン・スチール
JIS G 3

1. カーボン・スチールの構成元素と性質
2. 硬度と強度
3.
4. LCC・PSC・MCCS・PSCSの違い
5. 硬度測定法と強度測定法
6. 硬度・强度測定法による材料の選択と評価
7. カーボン・スチールの主な用途と特徴
8. 硬度・强度測定法による評価
9.
10. カーボン・スチールの硬さと強度の関係
11. 硬度測定法による强度評価
12. 強度測定法による硬さ評価
13. 硬度・强度測定法による材料の選択と評価
14. 硬度・强度測定法による評価

図 2 4. 教材 (No. 2 4)

タイトル	内容	日付
1	「おはよう」	1970.1.1
2	「おはよう」	1970.1.1
3	「おはよう」	1970.1.1
4	「おはよう」	1970.1.1
5	「おはよう」	1970.1.1
6	「おはよう」	1970.1.1
7	「おはよう」	1970.1.1
8	「おはよう」	1970.1.1
9	「おはよう」	1970.1.1
10	「おはよう」	1970.1.1
11	「おはよう」	1970.1.1
12		
13	「おはよう」	1970.1.1
14	「おはよう」	1970.1.1
15		
16	「おはよう」	1970.1.1
17	「おはよう」	1970.1.1

図 2.5. 教材 (No 2.5)

教材 No. 26

1 1
2 おはようございます。おはようございます。
3 おはようございます。
4 おはようございます。おはようございます。
5 おはようございます。おはようございます。
6 おはようございます。おはようございます。
7
8 おはようございます。おはようございます。
9 おはようございます。おはようございます。
10 おはようございます。おはようございます。
11
12 おはようございます。おはようございます。
13 おはようございます。おはようございます。
14 おはようございます。おはようございます。
15 おはようございます。おはようございます。
16 おはようございます。おはようございます。
17 おはようございます。おはようございます。

図 26. 教材 (No. 26)

タイトル フル・スコア・版
JPG

1 フル・スコア・版・CD
2 おもな楽器の名前・フル・スコア・版・CD
3 フル・スコア・版・CDの構成と音楽的特徴
4 楽器の名前 など
5
6 「音」の名前 など ～「音」の名前～
7
8 「音」の名前 など ～「音」の名前～
9 「音」の名前
10
11 「音」の名前 ～「音」の名前～
12 ～「音」の名前 ～「音」の名前～
13
14 「音」の名前 ～「音」の名前～
15 「音」の名前 ～「音」の名前～
16 「音」の名前 ～「音」の名前～
17

図27. 教材(No.27)

タイトル フルカラーテレビの基礎と応用

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17

1 現代のテレビ技術とその応用
2 テレビの構成と動作原理
3 テレビの構成と動作原理
4 テレビの構成と動作原理
5 テレビの構成と動作原理
6 テレビの構成と動作原理
7 テレビの構成と動作原理
8 テレビの構成と動作原理
9 テレビの構成と動作原理
10 テレビの構成と動作原理
11 テレビの構成と動作原理
12 テレビの構成と動作原理
13 テレビの構成と動作原理
14 テレビの構成と動作原理
15 テレビの構成と動作原理
16 テレビの構成と動作原理
17 テレビの構成と動作原理

図 2.8. 教材(No.2.8)

タイトル	内容
1	日本語の音韻
2	日本語の音韻と文法の関係
3	日本語の音韻と文法の関係
4	日本語の音韻と文法の関係
5	日本語の音韻と文法の関係
6	日本語の音韻と文法の関係
7	日本語の音韻と文法の関係
8	日本語の音韻と文法の関係
9	日本語の音韻と文法の関係
10	日本語の音韻と文法の関係
11	日本語の音韻と文法の関係
12	日本語の音韻と文法の関係
13	日本語の音韻と文法の関係
14	日本語の音韻と文法の関係
15	日本語の音韻と文法の関係
16	日本語の音韻と文法の関係
17	日本語の音韻と文法の関係

図 29. 教材 (No 29)

あとがき

以上で一応基礎段階を終わる。時間数はグループによって異なるが、46～60時間で終わればよい。

しかし、点字は読みも書きも速くなければ役に立たない。50音の終わった頃から、単語や文章書きの時間の終わりに、次のような早書きをさせるとよい。「全マスメ書き」を2分間とか、「ニ・フ・レ・レ下り・イ・長音」などを全マス1分間、「エン・リロ・タコ」など交互に1分間などが効果的である。少し進んだ段階では、マスあけを含めて「コトリ」とか、「ガッコー」などの単語を5分間書かせるのもよい。

読みの力つけには、マスあけごとに順に回し読みをすると、楽しく、はげみがつく。また、同じ文章を2度読ませたあとで、写し書きをさせるとよい。

マスあけ・カナづかいの練習は、新聞の時事面・社会面などの記事を取り上げて、経験を豊富にさせ、漢字の説明もしながら聞き書きをさせる。20～25行位書かせたあと、マスあけ・かなづかいを説明して各自に調べさせ、写し書きで正しく書き直したものと2枚提出させて評価すると力がつく。またこの段階で、2枚そろえて両手で触らせ、徐々に右手の読みの練習にはいると、自然に力がつき理想的である。

点字タイプライターは、ある程度力がついた後、希望する訓練生にのみ、その種類・特徴・使用法を個人指導すればよい。

数学・理科・楽符などの特殊記号や、英語の縮字・略字などの使い方は、訓練生の進路や必要度に応じて、基礎訓練終了後別に時間を設けなければならない。

最後に、指導する者は常に日本点字委員会の動きに注意し、それに従って指導すると共に、変更前の諸記号や、諸規則も、訓練生に一応教えなくてはいけない。点字の書物は相当古い原版のものも販売されているし、各地の図書館の蔵書としても利用されているので、それなりに対応できなければ、今後勉強するにも、読書を楽しむ上でも役に立たないだろう。

ここにまとめた要領は、この仕事を始めた昭和40年から1年1年研究し、工夫し、改善しながら現在行っているものである。今後また年を重ねるうち、更に改良するつもりである。

著者・日本ライトハウス職業生活訓練センター
生活指導員：コミュニケーション訓練担当